

Journey Rehab

田中光

代表



080-6344-4578

journeyrehab.net

千葉県松戸市松戸1228-1
松戸ステーションビル 5F

ビジョン

「すべての人が、その人らしい人生を歩み続けられるように」という理念のもと、リハビリの視点から支援を行い、より良い社会の実現を目指しています。

脳卒中の後遺症やパーキンソン病などで「もっとリハビリを続けたい」と思っても、制度の枠で十分に受けられない方は少なくありません。訪問リハビリを行う「Journey Rehab」代表の田中光さんは、一人ひとりの生活に寄り添い、自費リハビリを通じて“自分らしい暮らし”を支えることを大切にしています。ご自宅で安心して続けられるリハビリの形を追求し、地域での新しい支援のあり方を提案しています。（2025年8月取材）

「心と体のリハビリ」への魅力と制度の壁に直面した日々

まず、田中さんが作業療法士という専門職を目指されたきっかけについて、お聞かせいただけますか？

高校時代、進路について考えていた時に、父から「理学療法士や作業療法士という仕事があるよ」と勧められたのが最初の出会いです。私自身、卓球に打ち込んでいたこともあり、漠然とスポーツ選手のトレーナーのような仕事に憧れを抱いていたんです。ですから、当初は身体機能の回復を専門とする理学療法士に興味を惹かれました。



お父様から勧められた時、すぐに関心を持たれたのですか？

はい。もともとパソコン作業のようなデスクワークよりは、人と直接関わる仕事がしたいという思いがありましたので、すんなりと興味を持ちました。ただ、理学療法士と作業療法士の違いは全く分かっていませんでしたね。

そこから作業療法士の道を選ばれたのは、なぜだったのでしょうか。

決め手となったのは専門学校のオープンキャンパスです。そこで作業療法が「心と体のリハビリ」であると知り、その包括的なアプローチに大きな魅力を感じました。身体機能の訓練だけでなく、精神的な側面や、その人を取り巻く生活環境全体にまで働きかける学問だと知りました。例えば、料理や書道といった具体的な作業活動を通して、その人の「やりたい」という気持ちを尊重し、「できること」を増やしていく。その包括的な視点に大きな魅力を感じ、作業療法士の道へ進むことを決意しました。



専門学校をご卒業されてからは、どのようなキャリアを歩んでこられたのでしょうか。

地元の山口県で専門学校を卒業した後、上京して回復期リハビリテーション病院に就職しました。ここでは5年間、主に脳卒中を発症された患者さんのリハビリを担当しました。患者さんが日に日に回復していく姿を間近で見られることは、大きなやりがいでした。しかし同時に、医療保険制度の限界も痛感しました。脳卒中の場合、入院してリハビリを受けられる期間は発症から最大180日までと定められています。多くの患者さんがまだ回復の途上にあり、「もっとリハビリを続けたい」と強く願っているにもかかわらず、制度上の理由で退院せざるを得ない現実がありました。その度に、専門家として何もできない自分に歯がゆい思いを抱えていました。

医療保険適用下でのリハビリを経験された後、介護保険の分野に移られたのですね。そこでの経験はいかがでしたか？

同じ法人内の介護保険事業の部門へ異動し、訪問リハビリテーションと通所リハビリテーション（デイケア）を経験しました。ここで、在宅生活の厳しさを目の当たりにします。病院という整備された環境とは異なり、ご自宅では段差や狭い廊下など、生活を送る上での障壁が数多く存在します。医療保険から介護保険へ移行する中で生じるリハビリの質の変化や量の減少というギャップを埋めることの難しさを痛感し、在宅生活を支えることの重要性を再認識しました。



医療保険と介護保険、両方の現場を経験されたのですね。そこからなぜ、保険外のサービスに進まれたのでしょうか？

回復期病院で感じていた「もっとリハビリをしたい」という患者さんのニーズと、在宅で目の当たりにした生活課題。この二つを繋ぐサービスが必要だと強く感じるようになりました。そんな時、「脳卒中後遺症専門の自費リハビリ」というサービスの存在を知りました。保険制度の枠組みに縛られず、利用者さん一人ひとりの目標や生活スタイルに合わせて、時間や回数、内容を自由に設定できる。これこそが私が求めていた形だと確信し、その分野を専門とする企業へ転職しました。そこで3年ほど研鑽を積んだ後、より自分自身の裁量で、利用者さんと密接に関わり、自分の理想とするリハビリを追求したいという思いから、フリーランスとして1年間活動しました。

リハビリ難民と企業の健康問題、二つの社会課題解決を目指して

フリーランスとして活動される中で、法人化を決意された大きなきっかけは何だったのでしょうか。

フリーランス時代に受けた一本の電話が大きな転機となりました。「父が脳梗塞で退院するのですが、リハビリを受けられる場所が見つからず困っています。どうしたら良いでしょうか」という、ご家族からの切実なご相談でした。まさに、私がこれまで問題意識を抱えてきた「リハビリ難民」という社会課題の存在を、改めて突きつけられた瞬間です。個人として目の前の方を支援することはできても、…



続きはQRコードからアクセスしご覧ください → → →